小学校五年の部　佳作

対象作品／ニック・シャラット著『ねこと王さま』徳間書店

# 人にやさしくする事の大切さ

弘前市立大成小学校　阿部紘子

わたしは、『ねこと王さま』という本を読みました。この本を選んだのは、この本がわたしの大好きなねこがでてくるからです。

この本は、王さまとねこが主人公の物語です。王さまは、どの仕事も大変上手にできる人です。例えば、赤いじゅうたんの上を歩いたり、重いかんむりを落とさないように、頭にのせていることなどです。でも、お城には十二人のめし使いがいて、他の仕事は全部かれらがやっていました。そんなある日、王さまとかれの一番の友達のねこは、火をふくドラゴンのせいでお城が火事になり、住む所がなくなってしまうのです。

わたしがこの本を読んで、一番心に残ったところは、ねこが、王さまがお城で気持ちよく過ごせるようにたくさんふせんを用意して、それにたのみごとをきれいな字でめし使いに伝えたり、お城が火事になった後、引っこした家でも何もできない王さまのために、身の回りの世話を一生けん命したりしたところです。特に好きだったところは、〝王さまのイス〟を失って悲しんでいる王さまのために、ひじかけイスにキラキラしたキャラメルのつつみ紙をくしゃくしゃにして丸め、ペタペタはりつけてかざりつけたところです。それはほう石のようにかがやいて、イスはごうかになりました。わたしはこの部分を読んで、とてもやさしい気持ちになりました。また、何ももんくを言わず、王さまのために働くねこを、とてもすてきだと思いました。なぜなら、もしわたしがねこと同じような立場だったらと考えると、何もできない王さまにはらが立って、もんくを言っていただろうと思うからです。

お城を焼け出されてから、住む家をさがしたり、家具をそろえたり、めしつかいが一人もいなくなっても、ねこは王さまをみすてず、はげまして元気づけて、ずっとそばにいて世話をしつづけました。それまで一度も感謝の言葉を言わなかった王さまがねこにむかっていいました。

「たいせつなともよ、きみがいてくれなかったら、わたし

は、どうなっていただろう。きみほどすばらしいともだちは、どこをさがしてもいないにちがいない。きみがいなかったら、わたしは、どうしたらいいかまったくわからなかった。本当にありがとう」と。

この言葉で、ねこもわたしも幸せな気持ちになりました。

わたしはこの本から、周りの人々がこまっていたら、不満を言わず親切にすることを学びました。これから、両親や友達にもっとやさしくしたり、いつかは、こまっている人達のためにボランティア活動をしてみたいと思っています。